

# 悉皆金色を中心とする彩色技法に関する研究

## ～東京藝術大学大学美術館所蔵「阿弥陀三尊来迎図」の想定復元模写を通じて～

東京藝術大学大学院 美術研究科 博士後期課程 文化財保存学専攻 保存修復日本画

中村 祐子

東京藝術大学大学美術館所蔵「阿弥陀三尊来迎図」一幅（**図 1**）（絹本著色 119.5 cm×50.5cm 13世紀）（以下、芸大本とする）は、三尊の肉身と衣を全て金色で表す悉皆金色の三尊形式による来迎図の一作例である。阿弥陀来迎図は、浄土教の興隆とともに平安時代後期から鎌倉時代にかけて多様な展開をみせ、鎌倉時代末以降には悉皆金色のものが多く制作された。その中でも芸大本は、同形式の来迎図の中で比較的、欠損が少なく加筆も見受けられず、保存状態が非常に良好である。特に三尊に施された截金にはほとんど剥落もなく、制作当初の様子を窺うことができるという点でも貴重である。

本研究の目的は、芸大本の彩色技法と制作工程を分析し、自ら復元模写を制作することで、悉皆金色の阿弥陀来迎図の造形意識および表現効果を解明することである。

芸大本は、所蔵する東京藝術大学大学美術館の蔵品目録に載るのみで、現在までほとんど注目されることはなかった。作品自体も優品でありながら、同形式の阿弥陀三尊来迎図の研究史の中で取り上げられることがなく、正当な評価を受けてきたとはいいがたい。しかし、本研究によって、彩色技法を解明し、想定復元模写制作によって描かれた当初の姿を提示することで、芸大本の価値を再検討した。

芸大本は平成4年から平成6年にかけて修理が行われ、その際の記録写真（肌裏紙をはずした絹の裏面の写真とX線透過写真）によって、悉皆金色の彩色方法が通常の絹本の描画方法とは異なる制作工程をとることが分かった。また、目視調査や現状模写制作によって様々な彩色技法が使い分けられていることが推測できた。本研究では、修理時の資料を活用し、さらに高精細デジタル撮影や透過赤外線撮影、蛍光X線分析による調査を行った。そして、これらの調査で得られた情報と、同時代の類例作品との比較を基に、実際に芸大本の想定復元模写を行うことで、彩色技法について検討した。

芸大本に大きな欠損や加筆がないことは、保存状態が良好であったことのみならず、優れた彩色技法によるものであると考えられる。また、芸大本の彩色技法を解明することで、同様の技法で描かれたであろう同時代の他の阿弥陀来迎図の研究に関する資料となることを期待する。

具体的な研究方法として、まず剥落から覗く絵具層を詳細に観察することで、通常では見ることのできない制作工程を推測した。その推測から科学調査を行い、得られた資料とサンプル制作によって顔料の種類や彩色技法について検証した。また、欠損部分の図様は類似作品から類推した。そして、これらの研究成果を基に、想定復元模写を作成した（**図 2**）。実際に想定復元模写を行うことにより、どのような彩色技法が用いられたかを再現し、また描かれ

た当初の姿を提示することで、初めて絵師の技法の表現効果が明らかになると考えた。

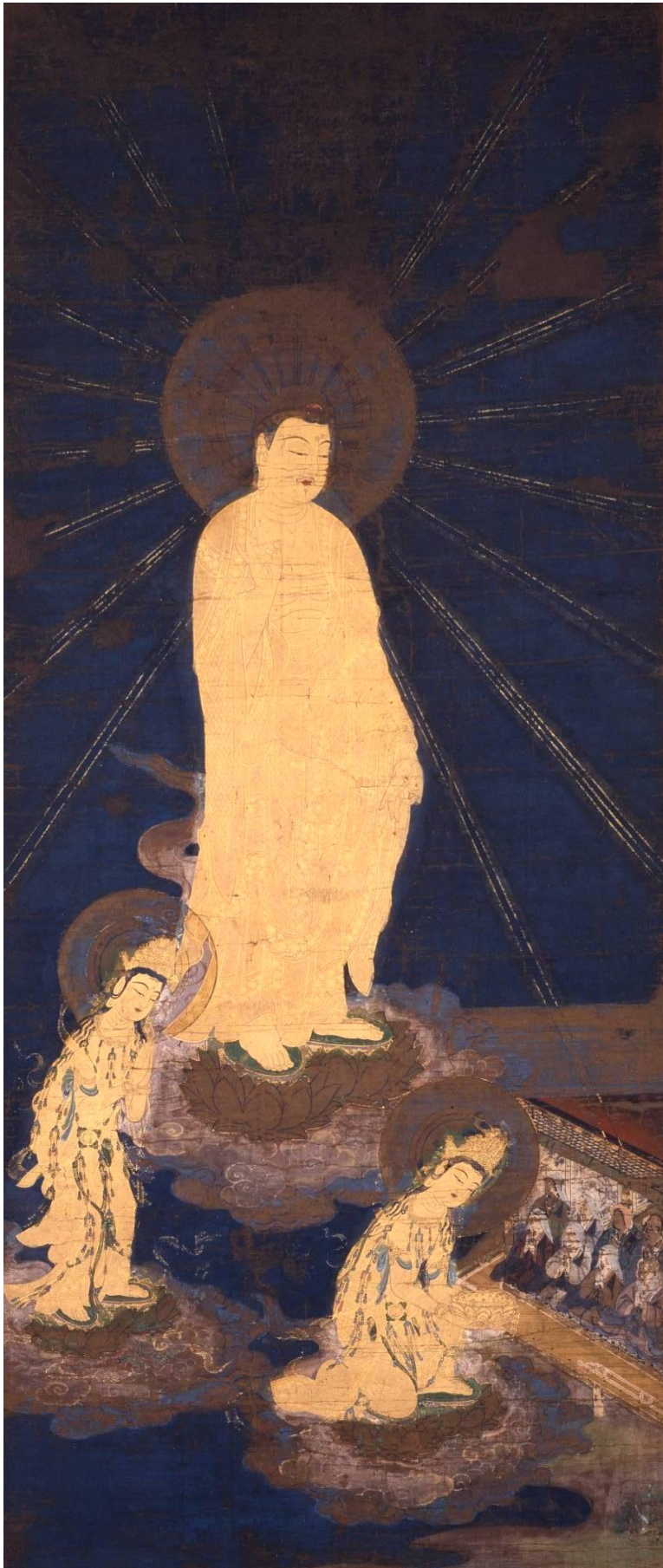
本研究では、芸大本における悉皆金色の制作工程を解明し、截金を剥落せず美しく見せるために平滑な下地が作られ、金の発色を良くするために下地に丹とみられる赤色系の顔料が塗布されるなど、目視では分かりづらかった制作上の工夫を明らかにすることができた。また、芸大本との比較により、同時代に描かれた他の悉皆金色の来迎図においても、同様の工夫がされていることが推測できた。

さらに、芸大本を詳細に調査することにより、群青と緑青などの顔料同士の混色や、さらにそれらの顔料と染料の混色や重色によって空間表現や立体表現がなされていることが解明できた。また、彩色を容易にするために、絹の目をつめる作業が行われたことも考えられ、本研究では水で抽出した布海苔の溶液を絵絹に塗布すると非常に近い結果が得られることが分かった。

このような彩色技法や制作工程の工夫は、一見しただけでは分からない繊細なものであり、芸大本は制作当初の彩色をよく残していることから観察することが可能であった。そのことから、芸大本は同時代に描かれた来迎図の中で、優れた作例であるといえる。

この研究の意義は、平安時代後期から鎌倉時代にかけての阿弥陀来迎図の変化について、以下のような新たな視点を提供することにある。

鎌倉時代には浄土教の興隆とともに、来迎図も量産されるようになった。仏身が光輝くという“悉皆金色”の教えは文字通り直接的に解釈されるようになり、仏身も平安時代にはあまり使用されない金箔や金泥によって金色を直接的に表現するようになったことで、“世俗化”や“工芸化”したと言われる。しかし、本研究によって、鎌倉時代の悉皆金色の阿弥陀来迎図が、金一色に見える表現の中にも様々な技術や工夫がされていることが解明され、単なる量産品として制作されたものではなく、高度な技術に基づいて、前の時代のものとは異なる新しい荘厳性を追求していたことを指摘できる。



(图 1)

東京芸術大学大学美術館 所蔵

「阿弥陀三尊来迎图」



(图 2)

東京芸術大学大学美術館 所藏

「阿弥陀三尊来迎图」

想定復元模写